

炎を司る皇帝ですが、真珠の血を持つ妻を迎えてから、夫婦の営みがお盛んです
体験版

1

西の大陸を焦がすような熱波が、今日も城壁を揺らしていた。この国、プロレタリアシアン大公国は、常に炎の魔力に守られていると同時に、その主が放つ強大すぎる熱量によつて、常人には耐え難い環境となっている。だが、私——リリアナにとっては、この熱こそが安らぎだった。いや、正確には「私がこの熱を無効化できている」という事実だけが、この城で生きる唯一の理由だったからだ。

「……おかえりなさいませ、シアン様」

重厚な執務室の扉が開かれると同時に、むせ返るような熱気が室内に雪崩れ込んでくる。そこに立っていたのは、銀髪に青い瞳を持つ、氷像のように美しい男。だがその身体からは、陽炎が立つほどの魔力が噴き出している。プロレタリアシアン大公殿下。かつて帝国から独立したため、実質的な皇帝ごとき権力を持つこの男。黒魔族の討伐から戻ったばかりの彼は、返り血一つ浴びていない。触れるものすべてを瞬時に蒸発させ、灰にする彼に、汚れなど付着する暇もないのだ。

「リリアナ」

私の姿を認めた瞬間、彼——シアン様の怜悯な瞳が、熱っぽい色を帯びて歪んだ。彼は太股で私に歩み寄ると、躊躇なくその腕を伸ばした。普通の人間ならば、この距離に近づいただけで皮膚が焼けただれ、抱きしめられれば骨まで溶けてしまっただろう。けれど、私は逃げない。彼の腕が私の華奢な身体を強く締め上げ、熱を帯びた頬が私の首筋に押し付けられる。

「ああ……リリアナ、リリアナ……」

じゆう、と私の肌の上で、彼が纏っていた魔力が音を立てて霧散していく。私の血管を流れる「真珠の血」が、彼の過剰な魔力を中和しているのだ。熱い。けれど、焼けるほどではない。まるで熱湯風呂に浸かっているような、心地よい痺れ。彼は飢えた獣のように私の匂いを吸い込み、首筋に顔を埋めて荒い息を吐いた。

「冷たくて、気持ちいい……。君だけだ。俺がこうして、力の加減をせずに触れられるのは」

「シアン様……討伐、お疲れ様でした」

「ああ。ゴブリンドモは片付けた。だが、魔力を使いすぎたせいで、身体の芯が火事のようだ。……鎮火してくれ、リリアナ」

その言葉の意味を理解し、私は身体を強張らせながらも、ゆつくりと頷いた。

鎮火。それは、夫婦の営みの隠語。彼にとつて私は、火照りすぎた魔力を冷やすための冷却装置であり、唯一触れることのできる「生きた肉人形」なのだ。

私は、上流貴族の父が、娼館の下働きだった母に産ませた不義の子だ。母譲りの卑しい血だと蔑まれ、屋敷の隅で埃のように息を潜めて生きてきた。華族の特権である魔力も持たず、美しいドレスも与えられず。

だがある日、魔塔の検査で私に「真珠の血」が濃く発現していることが判明した途端、すべてが変わった。魔力を無効化する稀有な体質。それは、強大すぎる魔力ゆえに孤独を強いられていた、西の「炎の怪物」への生贄として最適だったのだ。

（私は、道具。この人の熱を冷ますための、便利な道具……）

シアン様の腕の中で、私は自分に言い聞かせる。そう思っていれば、心が痛むことはない。愛されていると勘違いして、後で絶望することもない。けれど、彼の指先が私の背中を這い、ドレスのファスナーを乱暴に下ろすとき、胸の奥がきゅつと甘く疼くのを止められなかった。

「準備はできているな？ 今日特に、奥まで熱が溜まっているんだ」

シアン様は私を執務机の上に押し倒すと、一気にスカートを捲り上げた。あらわになった白い太腿に、彼のごつごつした手が這う。その掌は熱く、触れられた場所から火傷しそうなほどの快感が脳髓に駆け上がる。

「っ……あ、シアンさま……」

「いい声だ。君のその、俺の熱を受け入れて溶けてしまいそうな顔が、たまらなく好きだ」

彼は私の下着を引き裂くように脱がせると、秘部には目もくれず、その下――窄まりきった、排泄のための穴へと指を伸ばした。びくり、と私の身体が跳ねる。

「あ……そこ、は……」

「ここだろうか？ 君が一番、俺を感じてくれる場所は」

シアン様は嗜虐的な笑みを浮かべ、桃色に色づいた菊門を、親指の腹でぐりぐりと弄った。普通の夫婦なら、まずは清らかな秘肉を愛でるものだろう。だが、彼は違った。

最初こそ義務的な交わりだった。しかし、私の「真珠の血」が、粘膜の接触面積が広ければ広いほど、そして深く繋がれば繋がるほど、彼に快楽的な「冷却効果」をもたらすと知ってから、彼の性癖は歪な方向へと加速した。

「ほら、見てごらん。俺の指が触れただけで、こんなにヒクヒクと餌をねだっている」

私の肛門は、彼の熱い指に誘われるように収縮を繰り返していた。恥ずかしい。排泄するための汚い穴を、高貴な大公殿下に見つめられ、弄ばれている。けれど、その背徳感が、下腹部に重たい蜜を溜めさせていく。

「い、けません……そんなに見ないで……」

「隠すことはない。ここは君の身体で一番正直で、一番淫らな場所だ。俺の灼熱の楔を、文句一つ言わずに飲み込んでくれる、素晴らしい穴だ」

シアン様は、机の引き出しから小さな瓶を取り出した。中に入っているのは、火属性の魔獣から採れる特殊なオイルだ。常人が触れれば火傷するほどの熱を持つが、私には温かいローションにしか感じられない。それをたつぷりと指に絡めさせると、彼は躊躇なく、私の蕾へと指先を沈めた。

「んっ、くう……っ！」

異物が侵入する圧迫感と、熱いオイルの刺激に、私は背中を反らせた。彼の指は、皺の一つ一つを丁寧に伸ばすように、中で円を描いて動き回る。

「ふふ、熱いだろう？ 中がとろとろだ。俺の熱で、君の内臓がバターのように溶けているみたいだ」

「あ、あっ、熱い……シアン様、おなが、焼かれちゃう……」

「そうか、焼かれたいか。なら、もっと広げてやる」

一本だった指が二本に増え、ハサミのように左右に開かれる。括約筋が悲鳴を上げ、限界まで引き伸ばされる感覚。本来なら苦痛ではないはずの行為。だが、彼の手指から流れ込む強烈な魔力が、私の神経を焼き切り、痛みを強制的に快楽へと変換していく。

これが、「真珠の血」を持つ私の、悲しい性（さが）だった。強い魔力に触れると、身体が防衛本能として快楽物質を分泌してしまうのだ。シアン様はそのことを知っている。知っていて、わざと魔力を込めた指で、私の弱点を執拗に責め立てる。

「いい、すごくいい締め付けだ。リリアナ、君のこの穴は、俺専用の鞘だ。他の誰にも、こんな熱には耐えられない」

彼は私の耳元で囁きながら、もう片方の手で私の胸を鷲掴みにした。薄い皮膚越しに伝わる暴力的な熱量。乳首をつまみ上げられると、そこからも電流のような痺れが走る。

「うああっ、んんっ！ シアン様、シアン様あ……っ！」

「もつと鳴け。俺の名前を呼べ。君が俺だけを感じて、俺のためだけに開いていることを教えてくれ」

ズチュ、ズチュツ、と卑猥な水音が室内に響く。

オイルと、私の腸液が混ざり合い、彼の指の動きを滑らかにしていた。シアン様は私の反応を楽しむように、時折、直腸の壁にある敏感なひだを、爪先でカリリと引つ搔く。

「ひいつ!?　そこ、だめ、おかしくなるうつ!」

「ここか?　ここが好きなのか?　排泄するための場所で気持ちよくなってしまうなんて、君はなんて淫乱な妻なんだ」

侮蔑の言葉ではない。それは彼なりの、歪んだ愛の囁きだった。彼は私が「貴族の娘」として扱われることよりも、こうして「ただの雌」として、恥も外聞もなく喘ぐ姿を見ることを好んだ。それはおそらく、彼自身が「大公」という仮面の下に押し込めてきた、孤独な本能の裏返しなのだろう。

指が三本になり、私の蕾は限界近くまで押し広げられていた。ぽっかりと開いた穴からは、あふれ出た愛液とオイルが垂れ落ち、机の天板を汚している。シアン様は一度指を引き抜くと、自分のズボンを乱暴に引き下げた。現れたのは、凶悪なまでに怒張した、赤黒い剛直。その先端からは、ゆらりと湯気が立ち上っている。

「……ふう。もう限界だ。リリアナ、こつちを向け」

彼は私をうつ伏せにさせると、腰を高く上げさせた。いわゆる、犬のような恰好。顔を机に押し付けられ、無防備に尻を突き出す屈辱的な体勢。けれど、今の私には、恥じらいよりも渴望が勝っていた。早く、その熱い楔で埋めてほしい。空っぽの私を、あなたの熱で満たしてほしい。

「よく見えるぞ。俺の指で開発されたばかりの穴が、ヒクヒクと蠢いて、主人の帰りを待っている」

「はやく……シアン様、入れて……」

「焦るな。じつくりと味わわせてくれ」

シアン様は龟头を、私の窄まりにゆつくりとあてがった。

ジリッ、と粘膜が焦げるような錯覚。圧倒的な質量と熱量が、私の排泄口をこじ開けようとしている。

「入るぞ」

短く告げると同時に、彼は腰を一気に打ち付けた。

「ぎいつ——!?」

悲鳴とも喘ぎともつかない声が喉から迸る。裂けるような感覚と、内臓を押し上げられる重苦しさ。

太く、硬く、そして信じられないほど熱い肉棒が、私の腸壁を押し広げながら、深淵へと侵入してくる。

「う、ぐう……っ！ 熱い、熱いっ！」

「ああ……くそ、最高だ……！ 君の中は、まるで氷水のように俺を冷やしてくれる……いや、溶かしてくれる……！」

シアン様は苦悶と快楽が入り混じった声を漏らしながら、私の腰を掴んで固定すると、容赦のないピストンを開始した。

ガツツ、ガツツ、と骨盤同士がぶつかり合う音が響く。彼が突き入れるたびに、私の身体の中に溜まっていた「真珠の血」の冷却作用が働き、彼の熱を奪っていく。それは彼にとっては救済であり、私にとっては侵略だった。

「ひぐつ、あ、あ、あああっ！ お腹、お腹いっぱい、苦しいっ！」

「逃がさない。君の腸（なか）の形を、全部俺の形に変えてやる」

シアン様の動きは、まさに「肛虐」と呼ぶにふさわしい激しさだった。慈しみなどない。ただ、己の欲望を叩きつけ、私の存在そのものを塗り潰そうとするかのような暴虐。けれど、その乱暴な抽送の一突き一突きから、彼の孤独な魂の叫びが聞こえる気がした。

『俺を見ろ』

『俺を感じる』

『俺を置いていくな』

言葉には出さない彼の本音が、熱となって私の体内に注ぎ込まれる。だから私は、この痛みに耐えられる。いいえ、むしろ喜んで受け入れる。

「シアンさま……！ もっと、もっと奥まで……っ！」

「っ！ ああ、望み通りにしてやる！」

私の懇願に、彼のリミッターが外れたようだった。彼は私の腰をさらに高く持ち上げると、根元まで、いや、睾丸が食い込むほど深々と自身を埋め込んだ。直腸の奥にあるS状結腸の入り口、そこを彼の亀頭が強引に押し開こうとする。

「あつ、そこ、だめっ、そこは無理いつ！」

「無理じゃない。君は俺の妻だ。俺のすべてを受け入れられるはずだ！」

グリリッ、とさらに奥へ。未知の領域を蹂躪される感覚に、私の視界が白く弾けた。苦しいはずなのに、脳からは快樂物質が溢れ出し、よだれが口端から垂れ落ちる。

「あへっ、あ、あああっ！ 入って、くるう……お腹のなか、シアン様で、いっばい……！」

お腹の皮一枚向こうで、彼の男根がのたうつの分かる。異物感などという生易しいものではない。まるで焼けた鉄杭を打ち込まれているような、灼熱の快樂。私の体温も、彼の熱に同調して急激に上昇していく。

「リリアナ、リリアナ……っ！ 愛している、誰にも渡さない……！」

絶頂が近づくにつれ、シアン様の全身から放たれる魔力の炎が強まった。周囲の空気が揺らぎ、書類がカサカサと音を立てて舞う。けれど、彼の手は私を離さない。私の背中に爪を立て、私の髪を鷲掴みにし、私という存在をこの世界に繋ぎ止めるかのように。

「だすっ、俺の種を、君の汚い腸（なか）に、全部ぶちまけるぞっ！」

「はいっ、くださいっ、シアン様の熱い精液、ぜんぶ、私に……っ！」

私の言葉が引き金となった。シアン様は獣のような唸り声を上げると、最後の一撃を最奥へと突き刺した。

ドピュッ、ドピュルルッ！！

体内で、熱湯のような精液が炸裂する感覚。胃袋の下あたりが熱く膨れ上がり、腸壁に直接、彼の命が叩きつけられる。

「んぐううううッ！！」

あまりの量と熱さに、私は声にならない絶叫を上げ、白目を剥いて痙攣した。彼のペニスは脈動を続け、一滴残らず私の中に注ぎ込もうと収縮している。私の菊門は、彼の竿を離すまいと必死に吸いつき、溢れ出そうとする白濁液を堰き止めた。

長い、長い射精が終わった後も、シアン様は私の中から抜けようとしなかった。私の背に覆いかぶさるようにして、荒い息を整えている。彼の身体からは、先ほどの殺人的な熱気が消え、穏やかな温もりが伝わってきた。

「……リリアナ」

耳元で、甘く掠れた声が囁かれる。

「……はい、シアン様」

「君の中は、最高だった。……まだ、抜かないからな」

彼はそう言うのと、萎えるどころか再び硬さを取り戻しつつある自身を、私の中で蠢かせた。

「え………?」

「一回くらいじゃ、この数日の渴きは癒えない。今日は朝まで、君のこの穴を使い潰すつもりだ」

その言葉に、私はぞくりとした恐怖と、それ以上の喜びを感じていた。道具として扱われることへの安堵。そして、この「真珠の血」がある限り、彼は私を必要とし続けてくれるという確信。

けれど、私はまだ知らなかった。この歪んだ関係が、帝国からの使者と、新たな「真珠の血」を持つ者の登場によって、大きく揺らぐことになるということを。